Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま

速報。他館との連携事業数々

平成28年度企画展示
益々好評開催中!!

東京都埋蔵文化財センター報 106

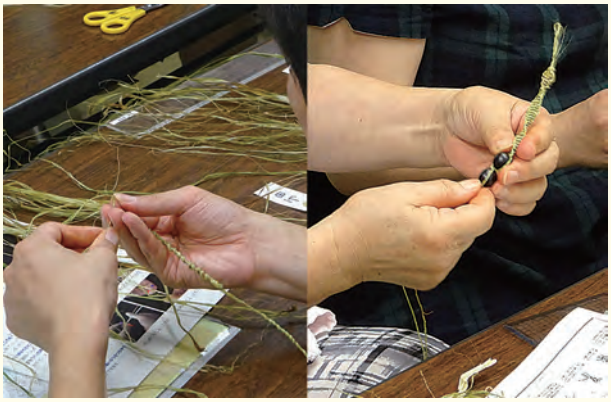
速報！ 東京都埋蔵文化財センターの 楽しい体験イベント 2016夏

2016年の夏季に行った事業の中から、調布市郷土博物館、文京区、多摩動物公園、西東京市と共同で実施した行事を紹介します。

まず紹介するのは、調布市郷土博物館との共同事業「**縄文苧糸（からむし）づくり体験教室**」です。こちらはカラムシの刈り取りに合わせて6月18日に実施し、15名が参加しました。「カラムシ」と聞くと虫を想像してしまいそうですが、虫ではなくイラクサ科の植物です。カラムシの茎からは丈夫な繊維が取れるため、古くは縄文時代にその繊維を使った糸や編布（あんぎん）などが作られていました。

当日は、下布田（しもふだ）遺跡に生えているカラムシを実見した後、郷土博物館分室で糸作りに取り掛かりました。午前中はカラムシから繊維を取る作業、午後がその繊維を使っての糸作りという予定です。カラムシの繊維部分は茎の皮にあるため、茎から皮を剥ぐところから始めます。皮を剥いだら、お引き板とお引き金具を使って繊維以外の部分をそぎ落とします。この工程は「苧引（おひ）き」と言われ、慣れるまではコツがいる作業です。はじめは不慣れな手つきで作業していた皆さんも次第に慣れて、順調に繊維が取れるようになってきました。取れた繊維を乾燥させたら、ここからが糸作りの本番です。繊維を撚（よ）るという慣れない作業に苦戦しながらも、時間が経つと立派な糸ができていました。この教室ではこの糸を使って、ねじり結びでストラップを作りました。ストラップの先端にムクロジの実のビーズを通して出来上がりです。ちなみに、ムクロジは調布の深大寺境内（じんだいじ）にも植えられています。漢字では「無患子」と書き、その字から子供が病気をせず健康に育つようにとの願いが込められているそうです。神社などに植えられていることが多いそうです。

カラムシの苧引きをしている様子



２本の繊維を撚って糸を作る様子（写真左）とその糸で作ったムクロジビーズ付きストラップ（写真右）

夏休みに入って間もない7月28日、この日は文京区との共同事業「**子ども考古学教室**」が開催されました。この教室は人気が高く定員を上回る数の申込みがあるそうで、今回は22名が参加しました。

当日は、考古学について、そして自分たちが住んでいる文京区内の遺跡について、それぞれ知るところから始まりました。遺跡の発掘調査をしている様子や発見された遺構や遺物などの写真を見ながら、文京区の職員から詳しい説明がありました。この教室では説明を聞くだけではなく、色々な体験も用意されていました。次に行ったのは、区内の遺跡から出土した本物の縄文土器や弥生土器を手に取りながら、土器の様子や文様、違いなどの観察です。また、黒曜石のナイフを使って紙や野菜を切る体験もありました。鋭利に割れる黒曜石では、包丁で切るのと変わらないくらい簡単に切ることができました。そして最後に勾玉（まがたま）作り体験です。皆さんはこれを楽しみにして

黒曜石のナイフで切る体験（写真左）と勾玉作り体験（写真右）

いたのではないでしょうか。材料の石に勾玉の形を書いたら、その形になるまでどんどん削っていきます。この削る作業の中でも、角ばっている部分を丸くする工程が一番難しかったようです。それでも一生懸命削り、仕上げの磨きまでやって、各自自分だけの勾玉がちゃんと出来上がっていました。

夏休みも後半に差し掛かった８月 20 日、多摩動物公園との共催事業「**親子で学ぼう！人間と動物のつながり－縄文人のくらしを探る－**」を実施しました。当日はあいにくの天候でしたが、11 名の親子が参加しました。この行事では、縄文人のくらしに深く関わっていた動物について、考古学、動物学の２つの視点から学ぶことを目的としています。ただし、縄文時代の動物と一口に言っても種類が多いため、今回は縄文人とゆかりの深い５種類（シカ・イノシシ・ウサギ・クマ・ヘビ）に限定しました。

ニホンジカの骨格標本を観察しながらワークシートに書き込む参加者たち

当日のプログラムは二部構成で、当センターでのギャラリートーク・動物などの毛皮に触れる体験、そして多摩動物公園では特別ガイドツアー・アオダイショウの観察という内容です。当日、参加者へ配布したワークシートは全部で５枚、動物ごとに考古学、動物学の設問が記載されています。設問に対する解答は直接言うのではなく、見学を通じて見つけることができるように解説の方法を工夫しました。

開催日当日は午前中からの降雨のため、多摩動物公園での見学が危ぶまれましたが、小雨になったタイミングを見計らって、イノシシ・ニホンジカ・ノウサギ・ツキノワグマの動物を一通り見学することができました。また、屋内で行ったアオダイショウの観察では、普段あまり触れることのないヘビを前に、緊張しながら手を伸ばしている参加者の様子が印象的でした。実は、縄文時代のヘビと言えば頭の形が三角のマムシを示すことが多いのですが、これは危険なので代わりにアオダイショウが登場しました。

触れた感じは、①ぬるぬる　②ベトベト　③さらさら　どれかな？

西東京市が企画した「**Doki！ドキ！親子縄文土器づくり体験教室**」は、７月 22 日・29 日・８月 25 日の３日間にわたり開催されました。当センターでは、７月 29 日の縄文土器作りと８月 25 日の土器の野焼きを共同で実施しました。縄文土器作りには８名の親子が参加しました。縄文土器は粘土紐を積み上げて形を作り、その後、文様を付ける作業を行います。慣れない粘土紐の積み上げや文様を付ける作業に少し手こずったのではないでしょうか。それでも、最終的に全員が立派な縄文土器を作り上げていました。夏休みも残すところ数日となった８月 25 日、遺跡庭園「縄文の村」で、制作した縄文土器の野焼きを行いました。焼き上がった縄文土器は、西東京市の下野谷（したのや）遺跡で行われる「縄文の森の秋まつり」で展示されるそうです。　（小西絵美）

遺跡から出土した本物の縄文土器を間近に観察しながらの縄文土器作り

野焼きも終盤に差し掛かる頃、燃え落ちた薪の間からゆっくりと縄文土器が姿を現す

遺跡だより 110

日野市　平山遺跡（ひらやまいせき）

所在地：日野市豊田・東平山・西平山
調査期間：2016 年 2 月～ 2016 年 11 月
調査面積：3,090 ㎡

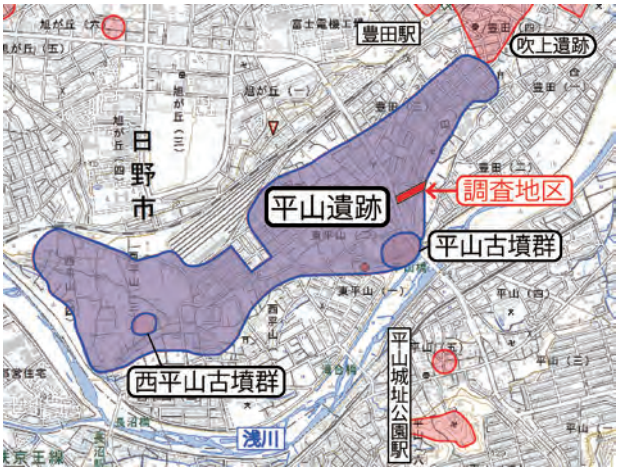
平山遺跡は、日野市南西部の豊田三丁目から西平山四丁目にかけて広がる広大な遺跡で、浅川（あさかわ）左岸の河岸段丘（かがんだんきゅう）上に立地します。1973 年の調査以来、断続的に調査が行われてきました。今までに、縄文時代前期・中期の集落跡、古墳時代の集落跡と二つの古墳群、奈良・平安時代の集落跡や平安時代の大型掘立柱（ほったてばしら）建物跡などが見つかっています。

今回の発掘調査は、国土交通省関東地方整備局相武国道事務所の一般国道 20 号（日野バイパス〈延伸〉）建設事業に伴うもので、平成 28 年 2 月 18 日から調査を始めました。調査地点は平山遺跡の中でも東端に近い場所です。

調査範囲の東端は、段丘の崖線部（がいせんぶ）にあたり、古墳時代の横穴墓（よこあなぼ）の存在が想定されました。しかし、盛土と礫層（れきそう）の堆積を確認したのみで、遺構は見つかりませんでした。一方、その西側に続く段丘上の平坦面では、円墳 1 基と古墳時代から平安時代の竪穴（たてあな）建物跡が 10 棟以上、中世の地下式坑（ちかしきこう）4 基と作業小屋と考えられる竪穴状遺構 1 基、近世以降の土坑（どこう）が 60 基以上発見されています。

なかでも円墳の発見は、平山古墳群の範囲がこれまで考えられていたよりも北に広がることを示しており、意義が大きいといえます。平安時代の竪穴建物跡からは、被熱して赤く変色した台石（だいいし）が見つかっています。鍛冶（かじ）などの作業が想定されますが、今後の詳細な分析結果が待たれます。また、奈良時代の竪穴建物跡では、炭化した木材が大量に発見されました。焼失家屋（しょうしつかおく）と考えられます。

奈良・平安時代の竪穴建物跡から出土した土師器（はじき）や須恵器（すえき）は、出土した建物によって製作手法に違いが見られます。成形の際に敷いた木葉の痕跡が残っている土師器の坏（つき）や甕（かめ）、ロクロを使って成形し、糸で切り離した痕跡が残る須恵器などがあります。このような製作手法の違いは、建物を使用していた時期がそれぞれ異なることを示しています。この時代の穀物栽培の様相を示す貴重な資料として、イネやアワの種実圧痕が認められる土師器も出土しました。また、焼失家屋からは、完形の鉄製刀子（とうす）が 2 本出土しています。



平山遺跡と周辺の遺跡（東京都遺跡地図に加筆）

ほかに、中世の地下式坑から陶器や石臼・石鉢が、竪穴状遺構から 1086 年初鋳（しょちゅう）の北宋銭（ほくそう）（元祐通寶（げんゆうつうほう））1 点が出土しました。なお、縄文時代の遺物包含層（ほうがんそう）からは、縄文時代中期の土器や打製石斧（だせいせきふ）などの石器、焼礫（やけれき）が出土しています。

現在、調査範囲の西側は調査を終え、段丘面東側の調査を進めています。今後、さらに多くの成果が予想されます。　（髙橋鵬成・守屋　亮）

※表紙写真は、調査範囲西側全景（北東から撮影）。

円墳（古墳時代）

竪穴建物跡（奈良時代）

かゆい所に手が届く 遺物の基本的な見方 縄文土器編②

よくある質問です「縄文土器の時代の見分け方は？」。一万年以上も続く縄文時代の膨大な数の土器がいつ頃のものか分かったら、気分はすでに考古学者！ですね。でも、皆さんがそう簡単に見分けてしまえば、我々の立場はありません。難しいことなのです。これでは、このコーナーの意味がないので、今回は、縄文土器の見分け方の入り口をお話します。考古学の世界に少し触れてみてください。

なぜ区別できるか？それは、土器の模様（文様）や形（器形）は、時代や地域で「流行」があるからです。その特徴を理解することは、各時代の土器を「イメージできること！」から始まります。

そこで今回は、中期の土器の見分け方入門編です。中期は前半と後半に大きく分かれ、関東地方で中期前半の代表的な土器は、勝坂式です。縄文土器といえば、勝坂式を思い浮かべる方も多いと思います。

勝坂式は、まずゴテゴテした印象・イメージです。時に気味悪いと感じることもあります。このイメージは勝坂式の持つ独自の装飾や文様にあります。

勝坂式は、土器の縁（口縁部）に立体的な装飾（把手）を施します。把手は、蛇や鳥などの動物をモチーフにしたようです。さらに胴の部分（胴部）には粘土紐（隆帯）で文様を描きます。この把手、隆帯で描く胴部文様が立体的なため、ゴテゴテしたイメージが出来上がるのです。加えて、底（底部）付近は「く」の字、ソロバン玉みたいに張り出す器形も特徴です。

中期後半の代表的な土器は、加曽利Ｅ式です。勝坂式に比べてシンプルでスマートな印象・イメージです。

文様は口縁部に渦巻きを描くのが特徴です。さらに、胴部には、蛇行しながら下る、まっすぐ下る模様を配置します。文様は、主に器面に線（沈線）で描くため、土器のシンプルさを引き立てています。

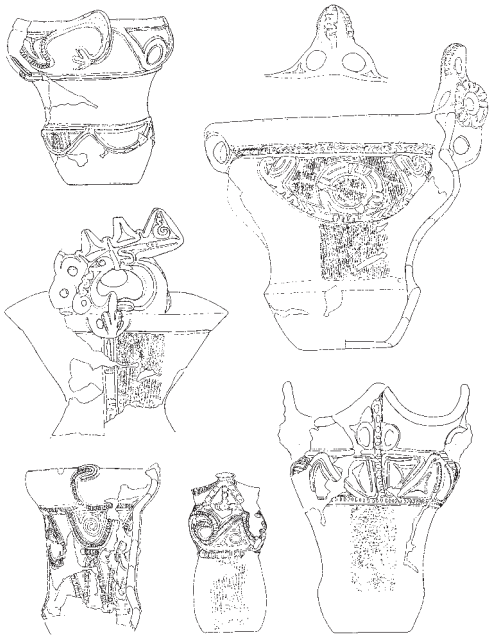
また、器形は口縁部が膨らみ、胴部でいったんくびれてまた少し膨らみます。女性的な柔らかい印象がシンプル・スマートさを醸し出すのでしょう。

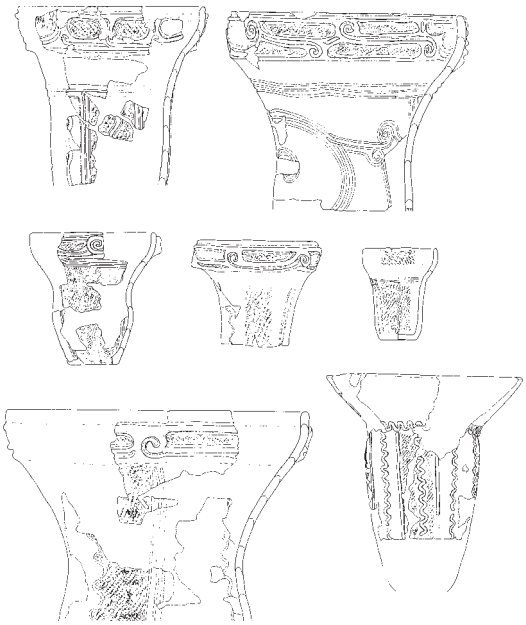
時代によって印象・イメージが異なるのは、文様・器形の流行で、同じ土器が多量に作られたからです。この同じ土器が作られる現象こそ、我々が「型式」と呼び、時代を見分ける指標となるのです。

土器作りには、ルールがありました。そのルール、つまり、土器製作マニュアルを当時は記録する手段がなく、各人の頭でマニュアルを記憶したはずです。このマニュアルを「範型」と呼びます。この範型こそが、型式のもとになっているのです。

土器作りは、親から子へ子から孫へと受け継がれ、少しずつ変化し、やがて、勝坂式から加曽利Ｅ式へと大きく変化します。

縄文土器（型式）を見分けるには、その時代独自の特徴を見出すことです。イメージできるようになるためには、実物を多く見ることです。是非、実物がたくさん展示してある当センターへお越しください。「百聞は一見にしかず！」ですよ。　（山本孝司）





多摩ニュータウン遺跡出土の勝坂式（左）と加曽利Ｅ式（右）　それぞれの違いをイメージできますか？

あの遺跡は現在（いま）！？　Vol.10

― 町田市立小山白山公園（おやまはくさんこうえん）　多摩ニュータウン No.245 遺跡 ―

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。このコーナーでは調査時と現在の写真を比べながら、調査後の遺跡がどのように変わったのかご紹介します。もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

前号で紹介した多摩ニュータウン No.248 遺跡から南へ徒歩数分。ゆるい坂を下り、「多摩境駅（たまさかい）西入口交差点」を渡ったところに「町田市立小山白山公園」があります。芝生の広場に沢山の遊具類、ゲートボール場や遊歩道、魚の泳ぐ池などが設けられ、行楽地のような目玉施設こそ無いものの、市民が思い思いの時間を過ごせる、まさに憩いの広場といった趣（おもむき）です。そしてかつてこの場所には No.248 遺跡と重要な関係を持つ No.245 遺跡がありました。

No.248 遺跡は大規模な粘土採掘が行われていた遺跡であることは前号でも紹介しましたが、No.245 遺跡ではその粘土を用いた土器製作が行われていたことが分かっています。遺跡内の 51 号住居跡からは文様を施されつつも、焼成されなかった土器が見つかっています。また、両方の遺跡から出土した土器や石器が互いに接合した例も確認されており、No.245 遺跡に暮らしていた人々が No.248 遺跡へ土器の材料を調達しに訪れていた様子が思い浮かべられます。

No.245 遺跡からすぐ南には環状列石で有名な東京都史跡の「町田市田端環状積石遺構（たばたかんじょうつみいし）」が保存されています。気候の良いこれからの時期、この周囲の遺跡を散策しながら、縄文時代の人々に想いをはせてみてはどうでしょうか。　（武内　啓）

写真 1 ：No. 245 遺跡を東側の No. 341 遺跡（多摩境駅と小山白山公園の間付近）から見た風景。手前の谷奥の台地上が No. 245 遺跡（左写真）。現在の小山白山公園内。左写真の台地上付近の様子。芝生や植栽が整備されている。タイル張りの舗装の地下には雨水の調整池が作られ、付近の洪水対策に利用されている（右写真）。

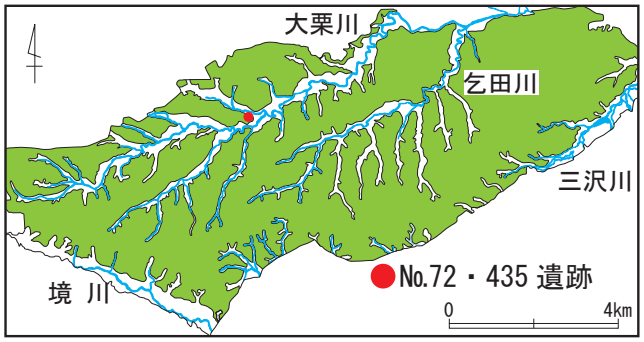
写真 2 ：51 号住居跡で見つかった未焼成の土器。すぐ近くから器台と呼ばれる土器製の台が併せて見つかっており、この器台の上で土器が作られていたのかもしれない（左写真）。No. 245 遺跡と No. 248 遺跡で分かれて出土した遺物が接合（遺跡間接合）した例（右写真）。No. 245 遺跡と No. 248 遺跡の関係については巻末コラムもご参照下さい。

1/964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

＃31 多摩ニュータウンNo.72・435遺跡

多摩ニュータウン№.72・435遺跡（遺跡登録の都合上二つに分れていますが、地続きの遺跡です）は、京王相模原線堀之内駅の北方７００ｍの丘の上にあり、都内でも有数の縄文時代中期の大環状集落（住居跡数300棟以上）です。遺跡は広大で密度が濃いため、多数の調査員により長期に亘って調査が行なわれました。私も短期間ですが調査に携わりましたので、その時の思い出を書いてみます。遺跡は現在大半が住宅地となっており、当時の面影を残す場所は、堀之内地区の氏神である北八幡神社くらいです。旧地形を復元すると、西から東へ徐々に低くなりながら尾根が延びており、尾根の先端部に縄文集落が営まれていました。



遺跡の位置

神社は、縄文集落の西端（山寄り）の地形が急斜面になる所に建立されています。神社の裏手に聳えていた高い尾根は削平されて、今は広々とした住宅地に生まれ変わっています。そして、緑に包まれた社の森だけがアパッチ砦のように残されており、境内前には、神社を見下ろすように高層集合住宅が建てられています。

北八幡神社

私は、1992年４月から９月まで調査に携わりました。神社の境内に上る階段前周辺を調査していた時、脇の農道にワゴン車が止まり、中から５人前後の若者達が降りてきて、「スタジオジブリというアニメを作る会社ですが、この辺をテーマにアニメを作成しているので、周辺を見せてほしい」との申し出を受けました。遺跡の見学ではなく、周辺の景色を見たいようなので、ご自由にと返答しておきました。一行は、北八幡神社の裏手から尾根上に延びる山道を登りながら、周辺の風景を写真撮影していました。私は当時アニメには全く無知で、スタジオジブリという会社名も知りませんでした。後日、テレビで「平成狸合戦ぽんぽこ」（1994年７月初放映）を見て、当時の記憶が鮮やかによみがえってきました。現場で取材をしていた人達の中に、著名な監督の方の姿はありませんでした。作品の中には、発掘現場の事務所として使用していた淡青緑色の平屋と二階建てセットのプレハブや周辺の造成工事現場の雰囲気が、デフォルメされてはいますが、生き生きと描かれていて驚きました。また、「耳をすませば」（1995年７月初放映）の中にも、神社裏手の尾根上から堀之内駅方面を望んだ風景が描かれている場面があり、あの時の取材を本にして描いたのかなと思っています。取材当時は生息していたであろう妖怪類も絶滅してしまい、今は閑静で美しい住宅地に変貌しています。さて、この遺跡に住んでいた縄文時代中期の人達は、どのような生活をしていたのでしょうか。

（今井恵昭）

遺跡とその周辺（1989年撮影）

神社の森と高層住宅

平成 28 年度企画展示解説 2

『南多摩発見伝　丘陵人の宝もの』 空から遺跡を見てみれば

遺跡の掘り上がりを記録し、測量するために撮影する空撮写真。様々な角度から遺跡の姿を撮影します。記録や測量に利用するのは真上から撮ったものですが、それとは別に、遠景をも含めて遺跡周辺を撮影したものは一味違ったダイナミズムに溢れています。今回は、この空撮写真で、企画展で取り上げた遺跡を２つほどご紹介しましょう。

写真１　No. 245 遺跡、No. 248 遺跡を北から望む

写真１はNo. 245 遺跡・No. 248 遺跡（町田市小山ヶ丘）を北側から撮影したものです。眼前の丘の上には、左側に建設中の京王線多摩境駅、右側手前に粘土採掘坑群が見つかったNo. 248 遺跡、中央に縄文時代中期～後期の集落であるNo. 245 遺跡が見えます。丘の先に開けた低地へ目を転じると、境川が西から東へと流れています。また、その対岸は相模野台地へと続き、地平線の右端が丹沢山塊へと連なっているのがよくわかります。さて、No. 248 遺跡で採掘された粘土がNo. 245 遺跡で土器作りに使われていたことは展示でもご紹介しましたが、さらにNo. 248 遺跡で採掘された粘土の推定採掘量から、作られた土器の数量を推定したところ、とても１遺跡だけでは使いきれない量の土器が作られていたことがわかりました。粘土の推定採掘量は634.92t、高さ 30 ～ 40 ㎝の平均的なサイズの土器（使用粘土は約２㎏）に換算すると、約 31 万７千個分にもなるのです。採掘期間を約 1,000 年とすると、毎年土器 317 個分もの粘土が採られていたことになります。一方、胎土分析によって、この粘土は境川沿いの他の遺跡でも使われていたことがわかりました。そこで、住居１軒が３００個の土器を消費する（年間 10 個、耐用年数30 年）として、採掘された粘土が住居何軒分に当たるか算定し、周辺遺跡の住居跡数と比較してみたところ、この粘土は、遺跡を中心に上流５km ～下流 10km 程の範囲で利用されていたと推定できました。また、No. 245 遺跡の人々は粘土の採掘場所や採掘量を管理し、その扱いや土器作りのコツなどについて他の人々に伝える役目を担っていたとも考えられています。彼らが、相模野や丹沢といった地域とも交流を持っていたであろうことを考え合わせると、遺跡のまわりを眺め渡すような、この一枚の中に、縄文世界の広がりが見えてくるような気がします。

写真２　No. 513 遺跡を南から望む

写真２はNo. 513 遺跡（稲城市大丸）を南側から撮影したものです。中央の丘がNo. 513 遺跡、正面に流れる多摩川の左寄りに是政橋、対岸には武蔵国府跡に比定される府中市街が望め、さらにその先は武蔵国分寺跡地域になります。No. 513 遺跡では奈良時代、武蔵国分寺の瓦が焼かれていたことがわかっていますが、この写真を見ると、No. 513 遺跡の立地、武蔵国府や武蔵国分寺との位置関係・距離感がよくわかります。出来上がった瓦が、橋のない多摩川を何処でどのようにして渡り、運ばれていったのか思い描いてみて下さい。また、瓦を焼いた工人たちと視線を重ね、それが葺かれるであろう国分寺の地をどのような想いで遠望し、窯仕事に励んだのか、想いを馳せてみて下さい。　（両角まり）

たまのよこやま 106　　2016 年 9 月 30 日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒 206-0033 多摩市落合 1-14-2　TEL 042-373-5296　http://www.tef.or.jp/maibun/